
8 7 6 プロのプロデューサー とあるラーメン屋で編

山口多聞 P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

876プロのプロデューサー とあるラーメン屋で編

【Nコード】

N2346Y

【作者名】

山口多聞P

【あらすじ】

アイドルマスターDSの世界に紛れ込んだPが織り成す物語。出張で故郷である名古屋へとやって来たPは、そこである人物と出会う。

（前書き）

ニコ動のウソm@sに便乗して1本。876Pシリーズとなります。

*当作品はかなり作者の地元ネタが混じっております。また作者はス○キヤの普及を願ってはいますが、決して廻し者ではありません。

「さてと、これで今日の営業は終わりだな。あとは、ホテルに帰って事務所に電話するだけ……にしても、まさか異世界のここに来ることになるとはね」

876プロのプロデューサーは、今日も今日とて忙しく外回り中であつたが、今日はそのために愛知県は名古屋にいた。

「ここは故郷であつて故郷じゃないんだよな」

Pはこの世界の人間ではない。本来はアイドルマスターDSがゲームや漫画として存在する世界に生きている人間であつた。しかし、原因不明の事故によってこのアイドルマスターDSの世界へと紛れ込んでしまった。

その後876プロのPとなり、メインキャラたちをトップまで導いた後は彼らのサポートを続けていた。

そんな彼の本当の故郷は愛知である。もちろん、異世界の愛知であるので厳密には今いる場所は故郷ではない。それでも、故郷らしき場所であるのは間違いなかった。

「けどまあ、名古屋は名古屋だ。帰るのは明日だし、今日は思いっきり名古屋を満喫するぞ！！特に食いもんだ！まずは小倉トースト！！東京じゃ食パンにマーガリンと餡を塗るだけで変な目で見られただけ、ここなら人目をばからずに食えるぜ！それに味噌ドテに味噌おでん！あ、「つけて味噌かけて味噌」も買っていけないと！！」

この世界に来て1年と数か月。最初の1年は涼たち876のメンバーをトップに導くのに精一杯で、あんまり故郷などのことは考えていられなかった。

しかしながら、心に余裕が出来てくるとそうしたことを考える機会も増える。親のことや友人のことも考えたが、こちらはどうしようもない。人知れず泣くしかなかった。

だが、故郷の文化はこちらの世界でも堪能できる。とくに、やはり愛知出身の彼にとって独特の食文化は一番味わいたいものであった。

ホテルに取って返して荷物を置くと、彼は早速ラフな格好で名古屋の街へ。

「小倉トーストは明日の朝にでもするかな。もう夕方だし、どこかで味噌カツかなんかでも食べていくか」

などと考えながら地下街を歩いていると、突然十字路の影から人影が現れた。

「わ!？」

「きゃ!？」

Pと若い女性の悲鳴が入り混じる。ぶつかりこそしなかったが、女性の方が転んだ。

「だ、大丈夫ですか?……て、君は？」

「ええ、大丈夫です。あ……帽子が!？」

「四条貴音さんじゃないか!?!どうして?」

なんと、いきなり現れたのは765プロのアイドルである四条貴音であった。

「名前を言わないでください!」

貴音がPに向かって言った直後。

「いたぞ!」

「貴音ちゃん!」

数人の男女が走ってきた。

「げ!?!おっかけか!」

「そうなんです!では、これで失礼!」

と貴音が走り出そうとした所。

「待って!こっち!」

Pは貴音の手を引っ張った。

「え!?!ちょっと」

Pは貴音を連れて地下街を走る。そして地上とを結ぶ入り口を上り、そのまま名古屋駅の中へと走った。

「ど、どちらへ!？」

「いいから、転ばないように気をつけて」

そしてそのまま雑踏に紛れ込む。

「ど、どこだ!」

「探せ!」

と追っかけ連中は2人を探すが。

「夕方の名駅でそうそう見つけられるものか!」

そしてそのまま駅構内のコンコースを抜けて、駅とは逆側にある地下街へと走りこんだ。

「ふう。どうやら撒いたみたいですね……大丈夫ですか?」

「ええ。お陰様で助かりました。人気が出るのもつらいもので、ファンに見つかった途端追いかけられました」

貴音は帽子を被りなおし、眼鏡をかける。

「真もあんな感じだったよな。しかし、名古屋にもいるんだな。追っかけ……それはともかく、ケガがなくて良かった。他所のアイドルに何かあったら大変ですしね」

「他所？では、あなた様はどこかのPなのですか？」

「876プロでPをしている者ですよ」

「そう言えば、以前事務所に來ていらしていましたね。どうして名古屋に？」

「出張だよ。明日には帰りますけど。君こそ、どうして名古屋に？」

「それは……笑わないでくださいね？」

「？」

「らめんの食べ歩きです」

「ああ、そう言えば貴音はラーメン大好きでしたね」

「はい。今日の朝新幹線で到着し、早速台湾らめんなる物を食したのですが、これが中々に美味でした」

台湾ラーメン。名古屋名物の一つだ。ちなみに、天津飯などと同じく台湾にはない料理だ。

「辛いけど、あれはあれで味わいがありますからね」

「ええ。そこまでは良かったのですが、熱くなって帽子と眼鏡を外したら」

貴音が視線を逸らす。これで大体Pもわかった。

「顔がばれて追いかけられたと？」

「お恥ずかしい限りですが」

「いえいえ」

（とは言うものの、他人事じゃないよな……涼たちにも変装するよ
う言っておくかな？）

と考えていると、貴音が声を掛ける。

「とにかく、お陰で助かりました。ですが、ここはどこなのでしょう
うか？」

「ここは名駅のツインタワー側の地下街ですよ」

「はあ……もしや、P殿はこの付近の地理に詳しいのですか？」

「まあ、地元ですから」

「そうなのですか……でしたら、ちょっと道案内をよろしいでしょ
うか？」

「ええ、どうぞ。わかる範囲でなら」

「スガ○ヤへ連れて行って欲しいのですが？」

「えー？ス○キヤテラーメン店の？」

「はい。私のりさあちによれば、そのスガキ〇は名古屋では有名な
らめん店だとのこと。食べない道理がありません」

「まあ、いいですけど。そうすると、もう一度駅の反対側に戻る必
要がありますか？」

「構いません。美味しいらめんを食べるためなら、多少の労苦は
厭いません」

「はあ、わかりました。では、どうぞ」

15分後、Pと貴音は赤い看板にラーメンとソフトクリームを持
ったイメージキャラクターが書かれた〇ガキヤへと到着した。

「ここがス〇キヤ？」

「そうですよ。さ、中に入りましょう」

「え！？一緒にお食べになるのですか？」

「うん。これも故郷の味ですから。看板見たら食べたくまりました
……あ、もし嫌でしたら離れた席でいいですよ」

「いえ、構いません。色々と不案内なことが多いので」

「それじゃあ入りましょう」

夕方であつたが、幸い2人が座るテーブルは残っていた。

「さてと、何を食べるかな？」

Pがメニューを見て考える。

「何かおススメはありますか？」

「そうですね。基本的にこの店のラーメンはどれも同じ麺と汁です。違うのはトッピングだけですから。基本はラーメン（1杯290円）でしょうか」

「でしたら、やはりまずは基礎ですね。ラーメンにしましょう」

「ああ、だったらせっかくだから名古屋流に食べていきませんか？」

「名古屋流？そのような作法があるのですか？」

「まあ、全員が全員そうやるわけじゃないけど、多数派であることは間違いないよ」

「……わかりました、ではそれをお願いします」

「了解です」

Pはレジに行って注文をする。

「店員さん。ラーメンとサラダのセット。それにソフトクリームをつけて2つずつ。あ、ソフトクリームは食後にお願いします」

それを聞いていた貴音が目を丸くする。

「は！？ソフトクリーム。らぁめん店でソフトクリームですか？」

「そうだよ。スガキヤではラーメンの後にソフトクリームがそれに類するデザートを食べるのが定番なのです」

「なんと面妖な!？」

「出た名セリフ! まあ、味は保証するから」

「はあ」

数分後、注文していた商品が用意され、Pがテーブルへと運ぶ。

「はい、おまちどおさま」

「ありがとうございます。ふむ、豚骨系のスープですね……おや、このすぷーん、先がふおーくのようになっていますね?」

「それもこのオリジナルだね」

「それからサラダに五目御飯。中々健康的ではないですか……では、いただきます」

「じゃ、私も」

2人は同時に麺を口にした。そしてしばらく咀嚼した後。

「「おいしい!」」

「やっぱり名古屋に帰ってきたらこれだよ!」

「豚骨スープと麺がよくあって、とても美味しいです……サラダと御飯もちょうどいい塩梅です」

「これだからやめられないんですよね」

「そうでしょうね、Pにとっては故郷のあじでものね?」

「そうですね。故郷は遠くなりにはけり……ですよ」

「……」

突如貴音が気難しそうな表情をした。

「あの?どうかしました?」

「ちょっと、気になることがあります」

「気になること?」

「後ほどお聞きします。今はせつかくのらめんを楽しみましょう」

「?」

ラーメンとサラダ、御飯を食べ終えた2人はデザートのソフトクリームをもらう。

「ふむ、確かにラーメンの後のそふとくりいむも乙なものですね」

「意外とラーメンの後に甘い物も合うんですよ」

「そうですね……時にP」

「はい？」

「Pはどちらにお泊りですか？」

「駅の近くのビジネスホテルですけど」

「では帰りはそこまで御一緒してよろしいですか？少し話したいことがあります」

「ええ、構いませんけど」

そしてソフトクリームも食べ終えて、2人はスガ○ヤから出た。

「それで四条さん。一体聞きたいことって何でしょうか？」

「はい。ではズバリ聞きますね……あなたはこの世界の人ではありませんね？」

その間に、Pは少々考え込んだが。

「……ええ、そうです」

「あら？意外とあっさりとお認めになるのですね？」

「ええ。前にも同じようなことがありましたから。それにあなたは涼の正体にも感じていた人ですし」

「なるほど」

「一応聞きますね。どうしてそう思ったのですか？」

Pの問に、貴音は微笑みながら答える。

「あなたからは他の人にはない面妖なオーラが出ていますから」

「やはりそんなところですか？」

「それに」

「それに？」

「あなたが先ほど故郷を思う言葉を話したとき、随分遠くを見ているように感じられましたから。まるで、故郷にもう戻れないような
なるほど、世界が違うのなら戻れないでしょうね」

「なるほど、適わないな」

「あなた様は何者のですか？」

「私は……」

Pは貴音に自分の正体を明かした。

「なるほど、そう言うことでしたか。色々と合点がいました。しかし、家族もいないこの世界で生きるのはつらくはありませんか？」

「そうですね。寂しいのは違いありません。けど、今の俺には育てなきやいけないアイドルたちがいますから。彼らのことを思えば、

そんなことはどうでもよくなります」

Pの脳裏に、涼や愛たちの顔が浮かぶ。

「なるほど。やはりお話が出来てよかったです」

「はい？」

「あなたの話を聞いて、少しばかりPの気持ちが変わったような気がします。Pとは、かようにアイドルを思っている存在なのだと」

「そうですね。少なくとも、765のPはそうでしょうね」

話している間に、Pの泊まっているホテルに到着した。

「ありがとう四条さん。1人で大丈夫かい？」

「ええ。ここから見えているので。1人でも大丈夫です」

「じゃあくれぐれも気をつけて。それからお願いだけど、さっきのことは」

すると、貴音は微笑んだ。

「お任せください。私も助けていただき、夕食を食べさせていただいた身。決して恩を仇で返すようなマネを致しません。黙っております」

「ありがとう。じゃあ、君も気をつけて」

「わかっています……P？」

「はい？」

「またお会いしましょう」

「ええ」

貴音は夜の名古屋の街へと消えて行つた。

「ふう。噂に違わず不思議な娘だ。けど、それが彼女の魅力なんだろうな……ひさしぶりにス○キヤも堪能できたし、アイマスキャラにも会えたし、ラッキーな一日だったな。しかし、この世界の765プロはどうなっているんだろうな……また調べてみるか」

Pは自分の部屋に向かって歩き始めた。

（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2346y/>

876 プロのプロデューサー とあるラーメン屋で編

2011年11月12日19時49分発行